

酒田市立資料館第223回企画展

ばいげつ

梅月 謎多き酒田の女絵師《新収蔵品展》

令和3年

11月27日(土)～2月20日(日)

令和4年

謎に包まれた女絵師・梅月の生涯

才能に恵まれながら、絵師として大成する前に若くして亡くなった梅月。酒田内町組の大庄屋・伊東家に生まれ、彫刻師の文錦堂（白崎善次郎）の養女になって江戸で絵を学んだといわれていますが、正確な経歴を記した文献や資料は見つかっていません。

梅月の人物像を知る貴重な手掛かりとなっているのが、庄内の歴史や文化を伝える膨大な随筆を残した庄内藩士・池田玄斎の随筆集『弘采録』『病間雑抄』（酒田市立光丘文庫蔵／酒田市指定文化財）です。玄斎は梅月と交流があり、絵師としての実力を高く評価しています。また和歌や俳句でも才能を発揮し、今様（※）を歌い、白拍子（※）の舞を得意とした才女で、「女子にては無双」と称賛しています。早く亡くなったことを惜しむ文もつづっています。

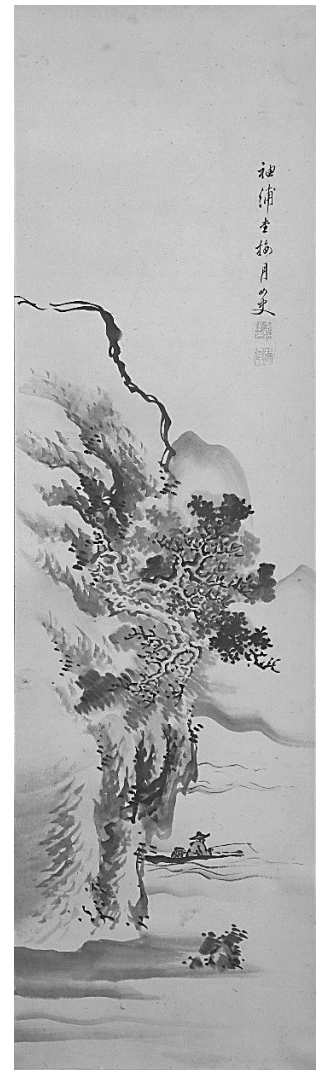
しかし、生没年や亡くなった年齢には触れていません。

明治10年（1877）に松山藩士だった上野源太夫が書いた『松雲居夜話』（鶴岡市郷土資料館蔵）にも大まかな記述がありますが、やはり生没年などには言及していません。

梅月は何歳で江戸に上ったのか。どんな修業をしていたのか。庄内に戻ってからはどう絵と向き合っていたのか。満足のいく仕事ができているのか。絵師としてどの程度の知名度を得ていたのか。何より、梅月とはどのような女性だったのか。謎は膨らみ、興味は尽きません。

※今様…今様歌の略。平安中期から鎌倉初期にかけて流行した新様式の歌。

※白拍子…男装で歌いながら舞う白拍子舞のこと。



令和2年度新収蔵資料
梅月筆「水墨山水図」

梅月の謎1 梅月の生没年と没年齢は？

梅月は弘化3年（1846）7月、33歳の時に江戸で亡くなり、酒田の妙法寺に葬られたといわれています。しかし、それを裏付ける資料や文献は見つかっていません。お墓の場所を確かめることもできていません。

初めて活字本で梅月を紹介したのは、昭和10年（1935）に出版された『荘内文雅人名録』（玄々堂芦汀編）と思われます。これには「弘化三年七月没」とあります。『病間雑抄』に「弘化三丙七月 梅宇来り（中略）早死に遺恨と甚だ惜しむ事也」と書いてありますが、これを下敷きにしたのかどうかは定かではありません。

その2年後に出版された『荘内人名辞書』（阿部正己著）は没年には触れていません。亡年齢は「齡三三？」と書き、断定はしていません。根拠とした資料は不明です。

没年を弘化3年として計算すると文化11年（1814）に生まれたことになりませんが、それだと伝えられている経歴に矛盾が生じてしまい、悩ましい謎になっています。

梅月の養父・白崎善次郎(文錦堂)とは

梅月の養父といわれる白崎善次郎(文錦堂)は、最上川埋木細工^{うもれぎざいく}を初めてつくった彫刻師です。最上川の川底に長年沈んでいた古木を使った文具などを製作したといわれています。跡を継いだ二代目も埋木細工を作っています。

池田玄斎は『弘采録』に、両親と江戸に出た梅月が天保5年(1834)に帰ってきたこと、翌年に梅月が師である氏家龍溪^{うじいえりゅうけい}の追善画会を主催し、その席で文錦堂に会ったことを記しています。

しかし初代文錦堂は20年以上前の文化8年(1811)に亡くなっています。追善画会に出たのは二代目だと考えられるのですが、そうだとすると梅月の養父も二代目だったことになります。

梅月がどんないきさつで文錦堂の養女になったのかも伝わっておらず、生没年とともに解明が待たれます。



最上川埋木細工 茄子置物
江戸後期

初代文錦堂の作か二代目の作かは不明。

梅月の謎2 梅月が江戸に上ったのはいつ？

池田玄斎の『弘采録』には、「12年以前に東都(江戸)に出」とあります。天保5年(1834)に書いた文章なので、文政12年(1829)のことでしょう。梅月が生まれたのが文化11年(1814)だとすれば、数え年で16歳以前のころです。そして天保5年、数え年21歳で庄内に戻ってきたことになります。

一方、昭和12年(1937)に出版された『荘内人名辞書』(阿部正己著)には、「文政5年(1822)ころ養母を伴いて江戸に出て画を画きて母を養へり」とあり、数え年9歳ころに上京したことになります。

人並外れた画才に恵まれていたとしても、まだ子どもで、絵の勉強のために上京した梅月に親を養うことができたのでしょうか。正確な生没年がわかれば、すっきりしそうな謎です。

玄斎は『病間雑抄』に、親子3人で江戸に出て梅月が筆ひとつで養ったとも書いています。母親だけでなく養父の文錦堂まで梅月の絵の稼ぎで生活していたとは考えづらく、これも謎です。

粉本(習作や手本の絵)にみる梅月の絵画修業

粉本「唐美人図」は円山応挙による原画をもとに描かれています。この絵を手本とした粉本が、応挙の門下生によっていくつも作られています。展示している粉本が、実際に原画を見て写したものか、粉本をさらに写したものはわかりません。

展示している粉本の中では、「唐人物図」と最後に飾ってある「山水図」も、一般の人がなかなか目にする機会のない原画をもとにしていると思われます。「唐人物図」は中国の明時代や清時代の絵に、「山水図」は南画(※)に学んでいるのではないかと考えられます。

梅月がどのような絵画修業や交友関係を経てこれらの粉本を手にしたのか、興味深い資料です。

江戸における梅月の活動の詳細はわかりません。しかし、現在残っている粉本に描かれている題材や絵の技法はさまざまであり、多種多様な絵に興味を持って修業に取り組んだ梅月の意欲がうかがわれます。

※南画…江戸時代に、漢詩文の素養のある人々によって描かれた絵。緻密に描きこんだ山水図や写実的な花鳥図などが描かれた。

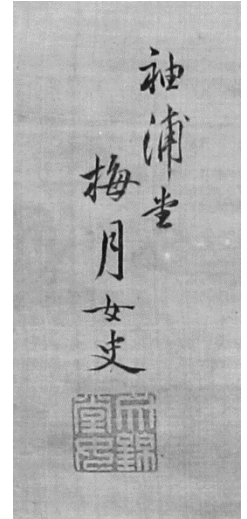
梅月の謎3 「袖浦堂梅月女史」と「文錦堂女」という署名

梅月はいくつかの作品に「袖浦堂梅月女史」という署名をしています。梅月の生家は酒田外野町の内町組大庄屋伊東家であり、養父・文錦堂は桶屋町で彫刻業を営んでいたといえます。どちらも異なる川南の袖浦(宮野浦)に、工房を構えていたということでしょうか。

また梅月の印には「梅月」「梅月女[?]」と「文錦堂女」の3種類が確認できていますが、印のあるほとんどの作品で「文錦堂女」の印を使用しています。

作品が少ないため深く考察することはできませんが、文錦堂の名前をあえて用いていることから、梅月の画業に文錦堂が大きくかかわっていたことを示しているとも考えられます。著名な儒学者らと文錦堂がやり取りした手紙の内容からも、文錦堂がそのつてを使い、梅月の活動を支えていたことが想像されます。

署名にどのような意味が込められているのかもまた、梅月の謎のひとつです。



「梅月女史」は特別な署名？

梅月はいくつかの署名を使い分けていますが、なかでも「梅月女史」という署名は、「女史」というかしまった自称に絵師としての自負を込めたようにも読めます。納得がいく作品に、特別に用いた署名なのかもしれません。

若くして亡くなったといわれる梅月が「これが私の絵だ」と言えるような、彼女自身の画風を確立するまでに至ったとはいえませんが、花鳥画に見られる丁寧で繊細な筆遣いや、山水画に見られる穏やかで優しい雰囲気は、梅月らしさといえるのではないのでしょうか。

今回展示している山水画3幅(うち2幅は旧蔵資料)には女史の署名を用いています。「蓬萊之図」は濃淡を使い分けた点描で梅の木や竹、波しぶきまで丁寧に描いています。「水墨山水図」は手前の岩壁を柔らかな輪郭線と淡い色で表し、その下に流れる川の水面も静かで、画面全体が穏やかな空気が漂っています。何かしらの手ごたえを感じて女史と記したのかもしれません。

展示している梅月の絵	署名	印
粉本 花鳥図(雉)	(なし)	文錦堂女(2つ)
粉本 梅図	(なし)	文錦堂女、梅月
粉本 張良図	梅月写	文錦堂女
粉本 武人図	袖浦堂梅月画	梅月女■
蓬萊之図	梅月女史	文錦堂女
水墨山水図	袖浦堂梅月女史	文錦堂女、梅月
冬景山水図	袖浦堂梅月女史	文錦堂女

梅月の謎4 著名な知識人や大名と親交があった？

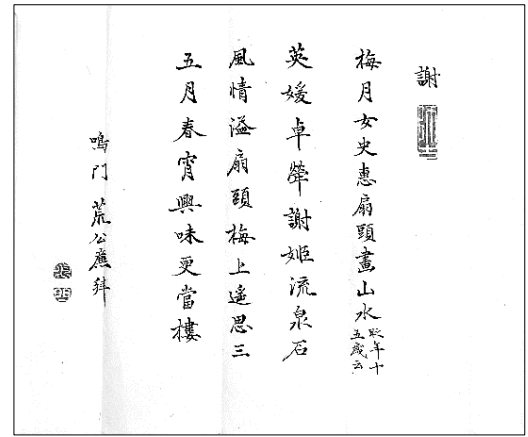
梅月が描いた扇絵をもらったお礼に漢詩を贈った漢学者・荒井鳴門あらいめいもんは、淀藩(京都府)に招かれ、留守居役まで勤めた知識人です。

また池田玄斎は『弘采録』に「高貴のお方にも度々召され」と書き、彦根侯のご隠居(井伊直中?)が梅月の絵をほめ、絵に書き添える直筆の歌などを贈ったと書いています。天保6年(1835)に梅月が主催した氏家龍溪の追善画会の席で、鍋島侯(佐賀藩主・鍋島直正?)から贈られた詩の写しを文錦堂

から見せてもらったとも書いています。

これが本当だとして、なぜ梅月はこうした身分の高い人の目にとまったのでしょうか。

初代文錦堂は、書の名手として知られていた江戸の儒学者・亀田鵬齋から埋木細工に対する賛辞文を書いてもらっており、二代目は国学者・鈴木重胤すずきしげたねなどの賛辞文をもらっています。どんなパイプを持っていたのかはわかりませんが、著名な知識人からお墨付きをもらって作品に箔をつけたのでしょう。プロデュース力に長け、梅月のことも機会を得ては売り出そうとしていたのかもしれない。



漢学者・荒井鳴門が梅月に贈った漢詩
年代不明

梅月とかかわりのあった庄内の絵師

筒井雲泉つつい うんせん／生没年不詳

梅月は江戸に上る以前、鶴岡の絵師・氏家龍溪から絵を学んでいます。酒田の絵師・筒井雲泉にも学んだといわれています。

雲泉は寺町生まれで幼少期より絵を好み、12歳のとき京都に上って扇子屋に奉公し、狩野派に学んで絵を描いたといえます。

酒田に戻った後は新地（現在の相生町と御成町）に住み、大酒を好みながら絵を描き、名人と称されたといえます。文政年間（1818～30）に60歳くらいで亡くなったと伝えられています。

佐藤梅宇さとう ばい／生年不詳～安政4年（1857）

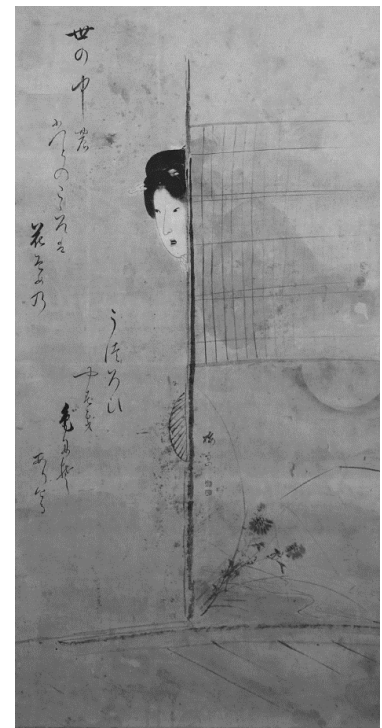
佐藤梅宇は、梅月や池田玄斎と親交があった絵師です。

飽海郡荒瀬郷の大庄屋佐藤源内の子として生まれ、幼少期より絵の才能があった梅宇は、江戸に上って谷文晁に絵を学んだといえます。花鳥画や人物画を得意とし、特に見事な梅の絵を描いたと伝えられています。のちに庄内藩の給人組外となり、飛島の島役人を勤めてしばしば島へ渡りました。当時の飛島の人々の暮らしや自然を描いた『飛島風俗図巻』（鶴岡市郷土資料館所蔵）を残しています。

池田玄斎は、天保6年（1835）に梅月が主催した氏家龍溪の追善画会が開かれ、梅宇も出席したことなどを『弘采録』に書いています。また『病間雑抄』には、梅宇が梅月の早すぎる死を惜しんだことも記しています。



筒井雲泉筆「猿図」（部分）
紙本墨画／江戸後期



佐藤梅宇筆「美人画」（部分）
紙本墨画淡彩／江戸後期

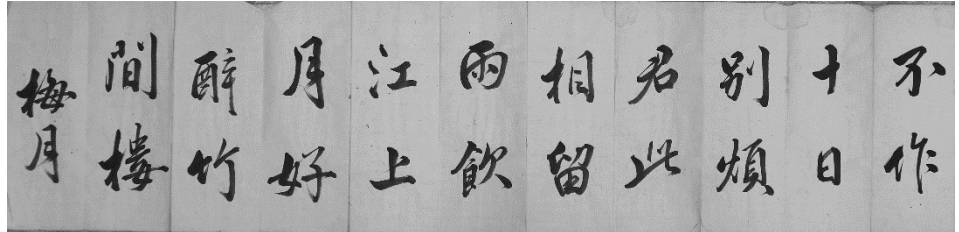
梅月が書いた漢詩

絵の才能があっただけでなく、俳句や和歌を詠み、歌や舞にも秀でていたと伝えられる梅月。新収蔵資料の中には梅月直筆の漢詩の作品があり、詩歌全般に通じていたことがわかります。

新収蔵資料の中から、五言絶句1首、七言絶句2首を紹介します。「江山孤亭図」という七言絶句は、梅月自身の山水画に書き添えるためのもののようにも読めます。

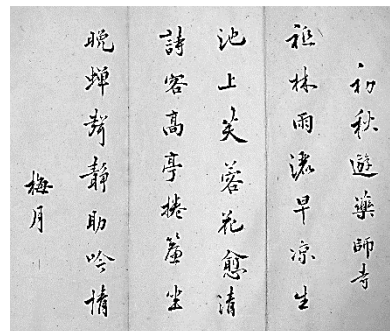
作品解説：菅原直香氏（全国漢文教育学会北海道・東北地区評議員）

不作十日別
煩君此相留
兩飲江上月
好醉竹間樓
梅月



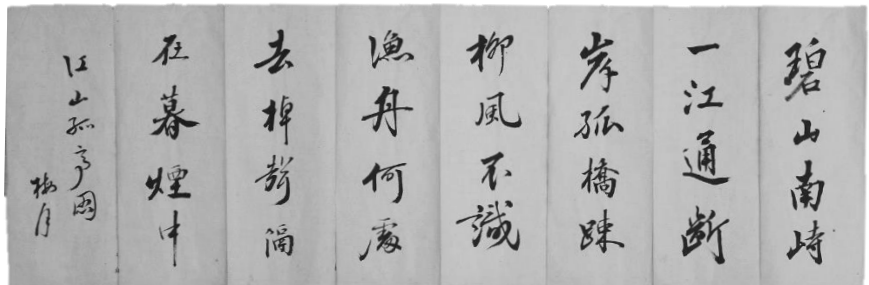
《詩の解釈》私とはあなたと十日間も別れていることができず
あなたに面倒をおかけしてここに留まっている。
二人で江上の月を眺めながら酒を酌み交わし
いい気持ちに酔って竹林の中の樓閣にいる。

初秋遊藥師寺
祇林雨灑早涼生
地上芙蓉花癒清
詩客高亭捲簾坐
晚蟬聲靜助吟情
梅月



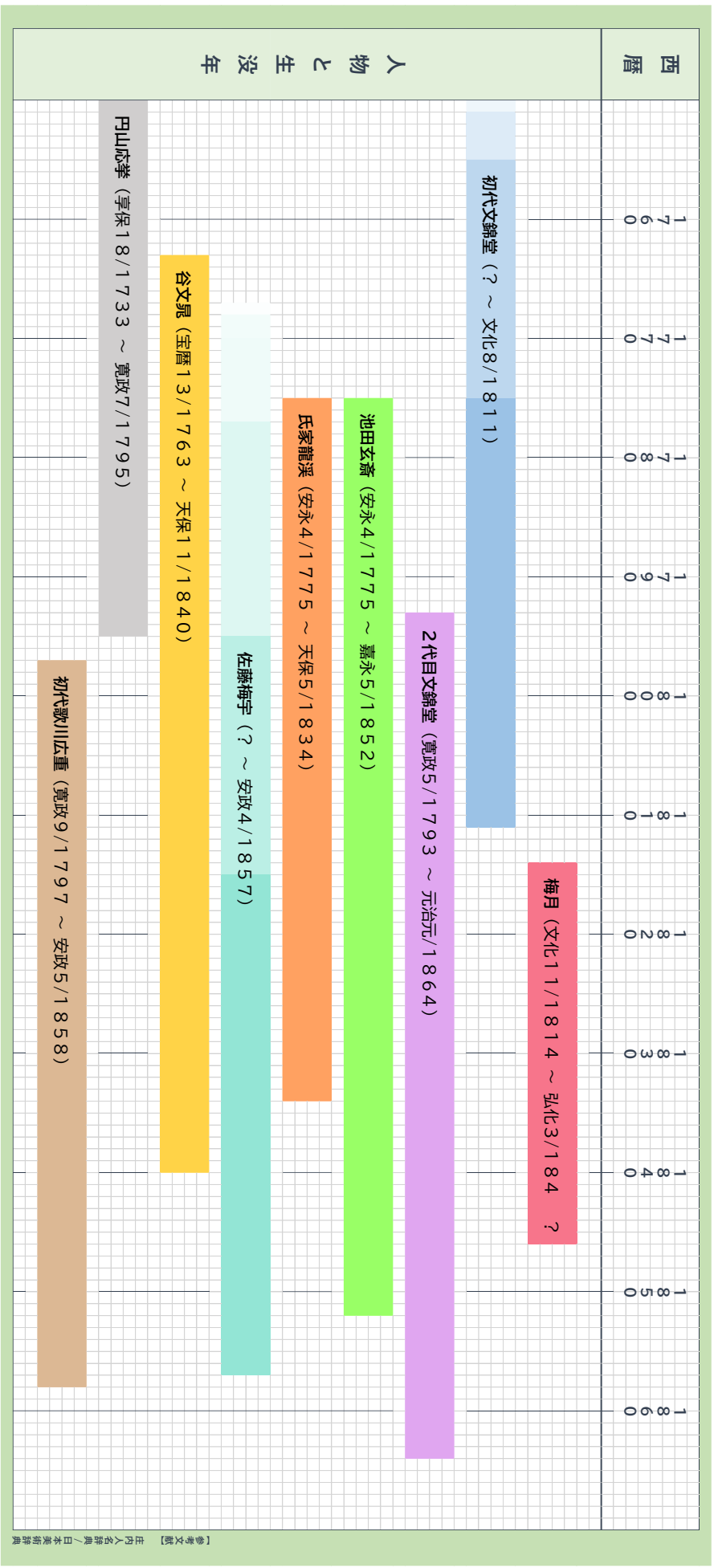
《詩の解釈》初秋 藥師寺をたずねて
初秋の雨がただ林だけに降りそそぎ、早くも涼しさが生じて
地上に咲くハスの花はますます清らかだ。
詩人は高くつくられたあずまやで簾を巻き上げて坐り
夕方に鳴いている蟬の声は、詩歌をつくり詠じようとする詩人の心を動かしているようだ。

江山孤亭図
梅月
碧山南峙一江通
断岸孤橋疎柳風
不識漁舟何處去
棹聲隔在暮煙中



《詩の解釈》山水と一軒のあずまやの図
碧山（青々とした奥深い山）が南にそびえ、そこに一本の川が通じている。
切り立った断崖の岸には一つの橋があり、そばの柳の木に吹く風もまばらだ。
先ほどまで見えた漁師の小舟はどこへ行ってしまったのか。
夕暮れのモヤの中、舟の棹をさす音だけが遠く隔たって聞こえてくるばかりだ。

梅月と同時代の人物の生没年表 (関係者・絵師)



【参考文献】 世田入名譜展「日本橋篇」



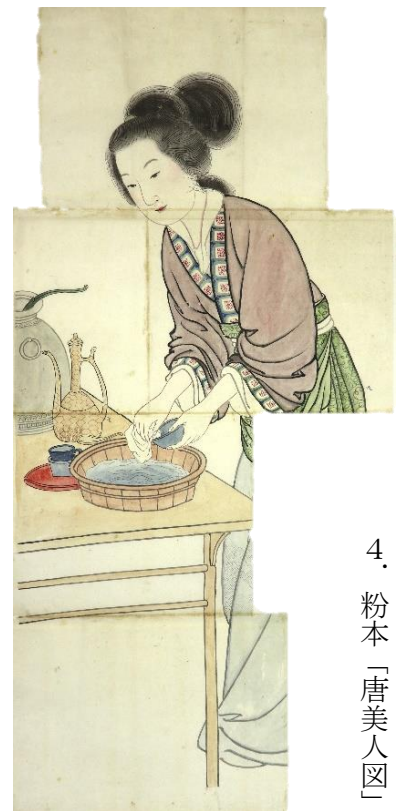
1. 粉本「花鳥図(雉)」



2. 粉本「梅図」



3. 粉本「唐人図」



4. 粉本「唐人美人図」



5. 粉本「張良図」



6. 武人図



7. 粉本「猪図」



8. 粉本「花鳥図（おしどり）」



9. 粉本「熊図」



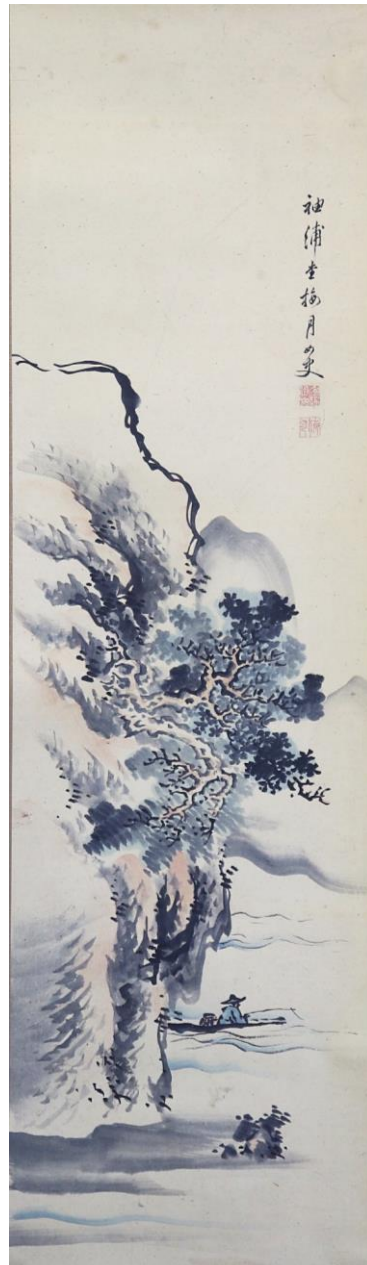
10. 粉本「花鳥図（ぎくろ）」



11. 粉本「山水図」



1 2. 蓬萊之図



1 3. 水墨山水図



1 4. 冬景山水図

1. 粉本「花鳥図 (雉)」梅月筆／江戸後期／紙本着色, 2. 粉本「梅図」梅月筆／江戸後期／紙本着色,
 3. 粉本「唐人図」江戸後期／紙本着色, 4. 粉本「唐美人図」江戸後期／紙本着色, 5. 粉本「張良図」
 梅月写／江戸後期／紙本着色, 6. 武人図梅月筆／江戸後期／紙本着色, 7. 粉本「猪図」江戸後期／紙
 本着色 8. 粉本「花鳥図 (おしどり)」江戸後期／紙本着色, 9. 粉本「熊図」江戸後期／紙本着色,
 1 0. 粉本「花鳥図 (ざくろ)」江戸後期／紙本着色, 1 1. 粉本「山水図」江戸後期／紙本墨画,
 1 2. 蓬萊之図 梅月筆／江戸後期／絹本着色, 1 3. 水墨山水図 梅月筆／江戸後期／紙本墨画淡彩,
 1 4. 冬景山水図 梅月筆／江戸後期／絹本墨画淡彩

酒田市立資料館では、調査のため梅月の資料を探しています。梅月の作品をお持ちの方などがおりましたら、ぜひお知らせください。TEL0234-24-6544